

たこあげ

中村 龍介

ポケットの携帯が鳴った。

「もしもし、麻子です。高速が渋滞中なの。三十分ほど遅れまーす」

四月の日曜日。妻の八回忌で娘たちを集めた。千葉に住む三女の麻子一家四人は車でやってくる。

末娘の康子は珍しく集合時間に来ていた。我が家に同居の次女の淳子、それに私を加えた七人で簡単な法要を行うことにしている。

三十分後、玄関のチャイムがなると廊下をバタバタと走る音がして、小学四年の孫、ハル君を先頭に麻子一家が到着。オーストラリア在住の長女を除く中村家全員が一堂に会した。

一息ついて、仏前に麻子と康子の持参した手土産を供える。先ず、私が線香をあげ、般若心経を読経。続いて、一人ずつ焼香してもらい、十分足らずで法要は終わる。

ピン・ポーン。それを待っていたかのように、出前の鮪が、何時になく定刻十二時キツカリに届いた。孫の二人はサビ抜き。生魚が苦手の康子は別メニューだ。ハル君は早速、兄のナオくと好物ネタの交換交渉に入る。

「ニニに桜エビをあげるから、オレにはマグロを頂戴！」

「いやだよ。お母さんに頼めよ」

「お母さんのは、ワサビが入っているからいやだよ」

「大丈夫よ。チャンと取ってあげるから」

麻子が、自分のマグロのネタを剥がして箸でワサビを取り除く。

「キレイに取らなきゃダメだよ」

母親からもらったマグロのニギリを口に入れ、「辛い！」と顔をしかめるハル君。一同から笑い声が漏れる。

食後は、みんなで凧揚げをすることになっている。本日のメイン・イベントだ。

予めネット通販で購入しておいたものが三点、麻子たちが持って来たものが二点、合計五匹のタコが勢ぞろい。



この日は久し振りの快晴。風もあつて最高の凧揚げ日和だ。多摩川の河川敷は我が家の直ぐ前。少年野球のグラウンドが二面ある。一面では野球少年たちがプレイに興じているが、もう一面は誰も使っていない。

我先にグラウンドに飛び出した孫二人が凧を放つと折からの風に乗ってアツという間に大空高く舞い揚がった。それを見て、私も凧揚げに挑戦してみる気になった。

もう何十年も前、子どもの時に奴凧や自作の角凧で遊んだ記憶はあるが、最近のゲイラ・カイトは初めてだ。

案ずるより産むが易し。風の方角を見計らって放った私の凧も元氣よく昇って行った。康子もやってみたいというので少し手伝ってやると、これも上手く揚がった。

天高く泳ぐ五匹のタコ。子どもたちは満面の笑みを浮かべ、大人たちもそれに劣らず楽しそうだ。

天候さえよければ、インドアのゲームなどより、はるかに健康的だろう。凧揚げは、孫たちが来た時の我が家の定番になるかもしれない。

【二〇一五年四月記 原稿用紙三枚

課題「電話にまつわる話」】